

## 論文審査の結果の要旨

平成26年7月28日

姜東星博士論文『林京子論—語りえぬものの実存を追い求めて』は、論題が象徴的に示しているように、長期にわたって心の深層に封殺してきた作家の「語りえぬものの実存」を、文学作品を通して追究した論考である。

上海という半植民地体験、引き揚げ体験、長崎原爆による被爆体験をくぐり抜けた内部の惨事、トラウマの記憶を、林京子が女性の立場から表象化していることを追跡し、先行研究を一步進め、深化させたといえよう。

第1章「傷の原型—長崎」では、原爆への怒りやそれを忘却することへの憤りをモチーフとした『祭りの場』を中心に分析し、長崎での被爆体験の惨状による林京子の決定的なトラウマの実存の原型を探究。第2章「外地の原体験—上海」では少女期における上海体験の記憶を追跡。第3章「生きる道の探究」では、〈少女〉探しや〈故郷〉探しが植民地問題を捉え直す視座となっていることを解析している。

第4章「〈ゼロ〉の存在—アメリカ」は林文学の到達点を示すものとして考察され、『祭りの場』における原爆への怒りからグランド・ゼロにおける「大地も被爆者」だという認識の達成へ、人類・文明そのものの問題として、21世紀の核時代の問題へとあらたな地平に辿り着いていることに論及している。

本論考の最大の特徴は、そうした今世紀の最先端に繋がる核時代の文学を、「祭り」をはじめとするメタファの解読、表現の分析を通して考察しており、さらに、女性の心身に与えた原爆の傷痕の表象を見据えていることである。

論述の方法に難点もあるが、以上の特色を中心に林文学の今日的意義を解明した最新の研究として評価し、合格と判定する。

主査 城西短期大学客員教授 長谷川啓